

〔武江年表<sup>六</sup>〕天明六年、淺草心月院門前なる與市といふもの、葶藶の根を以割麥の如く製し夫食とし、又葛の如く製して、食物にも糊にも用ふる工夫をなし、官許を得て、九月の末より、在々諸州迄も賣弘む。

〔甲斐國志<sup>百二十三</sup>〕產物及製造一葶藶和名土古呂 食經燒蒸充糧トアレドモ、今食者ナシ、蒸搗テ爲饅、乾シテ基盤及硯材ニ造ルベシ、

〔嬉遊笑覽<sup>十二</sup>附錄〕草木軍談と云草子に、美濃國横藏の藥師如來は萩にて作る、同國石越の圓興寺に安置せらる、觀音菩薩も萩なり、越後國久米山の藥師は野老にて作れり、歌に久米山の藥師のみくじところにて苦々しくもたふとかりけり、萩は大木ありとぞ、トコロは粉にして、煉りて器物に作るといへり、この藥師も然せしにや、

〔廣益國產考<sup>四</sup>〕葶藶 ところ

葶藶はところなり、本草諸書を按ずるに、無毒にして諸病を治するの大功あり、且食用にもあつべきものなれば、飢歲には五穀にかへて餓死をまぬかるべし、されば我邦にても、古へは食料となせしゆへ、和名抄にも芋の類におさめられ、崔禹錫が食經を引て、葶は味ひ苦く少しく甘し毒なし、燒蒸て、糧にあつといへり、中今は國により食ふ所あれども、大かたは只艸とこゝろえて、食となるべき事はしらす也けり、且此物藥となりて諸病を治する事も、唯醫師のみ知りて、諸人はをすることなし、年凶にして五穀登ず、邊境の民食に乏しく、飢餓におよぶの時に至りては、偶これを掘出すといへども、其苦味をしのびかね、得も食ざること多し、曾て戸谷老人なる人は、偶なげき、苦味を去る工夫をなし、此物毒なくして藥となる事どもの證をひき、製葶藶略記といへる書をつゞりて、世人にしらせたれども、苦味をぬき製するに至りては、口傳とばかりしるし、且その書、梓にのぼせざれば、世に知る人稀なり、故に予永常大職職これを歎じ、其書を補はんことを願